

五ノ事一歩・一歩一尺、一歩一尺

謝辞

（フニアチャイルド・ハウス）のリク・オルソとベアトリス・アブリグリアーノ・ジグラーに謝意を捧げたい。本書をものするに際し、著者は彼女たちのニューオーリンズ式の丁寧なもてなしに大いに助けられ、また鼓舞された。

1

ケラーは胸のポケットから自前のピンセットを取り出し、それを使ってグラシン紙の封筒から切手を注意深く抜き出した。その切手は星の数ほどあるノルウェーの郵便ラッパ・シリーズのもので、値段は一ドルもしなかった。が、どういふわけかなかなか見つからず、彼のコレクションにはまだ加えられていなかった。その切手を明かりにかざしてよく調べ、まへの所有者がアルバムに貼るときに使ったピンジ（片側だけ削ぎかけ紙）が取り除かれた紙の部分（片側だけ削ぎかけ紙）が薄くなっていないかどうか確かめた。それが確かめられると、買うことにして切手を封筒の中に押し、脇に置いた。

デイラーは極端に瘦せた背の高い男で、顔の片側が硬直していた。男が言うには顔面神経麻痺を患っているとのこと、片頬に笑み浮かべて言った「見て嬉しいものをひとつ挙げるとするなら、それは自分のピンセットを持ち歩いておられるお客さまです。見てすぐ熱心なコレクターが店にやってきましたってわかりますからね」

ケラーは自分のピンセットを持ち歩くこともあれば、持ち歩かないこともあり、それは熱

心ざといふよりただの記録力のせいではないかと思つた。旅に出るときには、いつも千百ペーじもある分厚い「スコット・カタログ」を持って出る。それには世界最初の郵便切手（一八四〇年にイギリスで発行されたベニー・ブラック）から、郵便時代の最初の百年に発行された切手が写真入りで載っていた。大英帝国の切手だけはジョージ六世が死んだ一九五二年のものまで含まれた。ケラーが集めているのがそれらの切手で、そのカタログは資料としてだけでなく、チェックリストとしても使っていた。コレクションに新しい切手が加えられるたびに、切手の番号を赤い丸で几帳面に囲むのだ。

そのカタログが常に彼とともに旅をするのはそういうわけだ。それが手元になければ物色すべき切手を知る手だてがない。ピンセットは持っていれば確かに役に立つが、どうしても必要というわけでもない。誰であれ、彼に切手を売ろうとする者からいつでも借りることが出来る。だから荷物に入れるのをついつい忘れてしまう。それに出発直前に思い出しでも、飛行機に乗るときには、服のポケットや手荷物に入れるわけにはいかない。セキユリテイ・ゲートにいるどこかのまぬけに没収されてしまう。切手用のピンセットを武器にするテロリストを想像するといふ。客室乗務員の胸ぐらをつかんで、眉毛をむしり取ってやるぞと脅すくらいはできるかもしれないが……

今回ピンセットを持っていたのはケラーにしても意外なことだった。カタログを持っていくのさえやめようと思つていたのである。今回の依頼人の仕事はまえにも一度請け負つたことがあり、そのときにはアルバカーキーまで出向いたのだが、荷解きをする暇もなかった。珍しく過剰なまでに用心を重ね、三軒のモーター車を予約し、それぞれチェックインまですませながら、結局のところ、衝動に任せてあつというまに終わらせ、どのモーターにも泊まることなく、その日のうちにニューヨークに戻つたのだ。だから、今回依頼された仕事も滞りなく手早く片づけられれば、切手を買う時間もないだろうと思つたのだ。それに、アイオワのデモインに切手ディーラーがいるなんて誰にわかるや。

遠い昔、まだ子供の頃なら——ごくたまに週に一ドル以上、あるいは二ドル奮発して切手のコレクションを増やしていた頃なら——この町でもそうであったように、切手ディーラーはデモインにも大勢いたことだろう。切手蒐集は今も相変わらず人気のある趣味だが、街中にある切手専門店には絶滅危惧種のリストに挙げられている。保護しようとする動きも見られない。最近の切手の取引はそのほとんどがインターネット販売や通信販売でおこなわれるからだ。わずかばかりのディーラーが今でも店を構えているのは、切手を販売するためというより、得業、切手を売ってくれるかもしれない客の注意を惹くためだ。切手に知識も興味もない男でも、毎日店のまえを過つていけば、フレッド伯父さんが亡くなり、売れそうない切手のコレクションを相続した場合、それをどこへ持っていけばいいか、すぐにわかるというわけだ。

切手ディーラーは、ジエームズ・マフキニューという男で、デモイン郊外の町、アーバンデ

ールのデグラス・アヴェニューにある自宅の一階の玄関側を店にしていた。ケラーにはその町の名がいかにも語彙を富に思えた。アーバンデール？そこはことさら都会にも広い谷にも見えなかった。住むのにはきつと快適な町なのだろうとは思ったが。マツキエーの家は築七十年ぐらゐの木造家屋で、玄関ポーチと出窓があった。店主はパソコンのまえに坐っていた。たぶんそこで仕事の大半をこなしているのだろう。ラジオから耳にやさしい音楽が低い音量で流れていた。店の中は居心地がよく、がらくたでさえ整然と置かれており、心が和んだ。ケラーは残りのノルウェーの切手を一枚一枚丹念に見て、もう二枚コレクションに加えてもいいものを見つけた。

「スウェーデンのものは要りませんか？」とマツキエーが言った。「スウェーデンのはとびきりいいがあります」

「スウェーデンの切手は結構そろっていてね」とケラーは言った。「現時点で欲しいのは高くても手が出せない切手だけだ」

「その気持ち、よくわかります。一番から五番はお持ちですか？」

「奇遇だな。それは持っていない。と、いって、三スキリング(スウェーデンで近世から十九世紀後半まで用いられた価値ある切手)・オレンジを持ってゐるわけでもないが」「スコット・カタログ」に一日と番号をつけられたその切手はエラー切手で、ブルググリーンにするところを誤ってオレンジに印刷されたものだった。きわめて珍しい切手ということで、数年前に所有者が変わったときには三百ドルで取

引きされていた。あるいは、三百ユーロだったか。ケラーは思い出せなかった。「それはうちにはありませんが」とマツキエーは言った。「一番から五番までならそろってあります。お手頃な値段です」ケラーが眉を吊り上げると、マツキエーは言い添えた。「公式の再販切手です。未使用、センターの状態はまずまずで(正確な中心位置を指す)、ヒンジ痕が少しあります。カタログにはそれぞれ三百七十五ドルと書かれています。見てみますか？」店主はケラーの返事を待たず、ファイナルボックスの中を調べて一枚のストックカードを取り出した。それには保護用のクリアファイルがついていて、中に切手が五枚はいっていた。

「急ぎませんから、とくとご覧ください。なかなかのものでしょうか？」
「とてもいい」
「この切手でアルバムの空白をお埋めになつてはどうです。それにそろすれば、あのときこの切手を買っておけばよかつたなんて、あとで後悔せずになりますよ」
今後オリジナルの切手が手にはいることがあったとしても——およそありそうにないことだが——再販切手のセットがコレクションにあつてもよさそうに思えた。ケラーは値段を尋ねた。

「セットで七百五十ドルと言いたいところですが、六百ドルで結構です。郵送する手間が省けますから」

「五百ドルなら」とケラーは言った。「考えるまでもなく、すぐに買うよ」

「そういうことなら、どうせじっくりお考えください」とマッケニーは言った。「六百ドル以下ではお売りできません。クレジットカードも使えますよ。そのほうがお買い求めやすいれば」

そのほうがお買い求めやすかった。が、ケラーはそういうルートを通る気はしなかった。自分の本名が記載されているアメリカン・エクスプレス・カードを持ってはいたが、今回の旅で本名はいつさい使っておらず、今後も使おうとは思わない。(ハーツ) からニッサンのセントラを借りたときにも、(アイズ・イン) にチエフタインしたときにも、ワイザカードを使っており、その名義人の欄に書かれているのはホルデン・ブランケンシップという男の名だった。財布の中にはそれと同じ名前が書かれているコネテイカット州の運転免許証もはいっていた。ブランケンシップのミドルネームのイニシャルは「J」。そのイニシャルひとつで、彼と世に存在する彼以外のホルデン・ブランケンシップとの差別化が図れるというわけだ。

クレジットカードと運転免許証を調達してくれたドットによれば、空港のセキエリテイ・ゲートはその運転免許証で通過でき、カードのほうは少なくとも二週間使えるということだった。が、クレジットカードで使った金は、請求されても支払う人がどこにもいないわけだ、いずれ不渡りになるだろう。(ハーツ) や (アイズ・イン) やアメリカン航空にカードで支払った代金がそうなっても、ケラーは少しも気にならない。しかし、切手ディーラーを

騙し、本来そのディーラーのものになるはずの金を取り上げるような真似はしなくかった。損金がかかるのはおそらくクレジットカード会社なのだろうとも思ったが、それでもやはり気が差した。切手蒐集という趣味は、彼の人生で唯一やまじいところのない領域だ。切手を買いながらその代金を払わなければ、それはつまるところ盗みであり、ジェームズ・マッケニーから盗もうが、クレジットカード会社から盗もうが、盗んだことに変わりはない。彼のアルバムのスウェーデンの欄の最初のページを公式の再販切手で埋めることには、なんの間題もない。が、そうするために盗んだ再販切手を手に入れたとは思わなかった。たとえそれがオリジナルであっても、盗んだ切手は欲しくなかった。きちんと金を払って手に入れたのでなければ、買わずに立ち去るほうがまだいい。

ドットならそんな考えにびしやりと反論するだろう。少なくとも、あされたように眼をぐるりとまわすぐらいのことはしてみせるだろう。しかし、コレクターならその大半がわかっ

てくれるにちがいない。

それより現金がそれだけあるだろうか。

店主のままで確認したくはなかったの、ケラーはトイレを使わせてくれと言った。どっちみち、それは悪い考えではなかった。朝食の際にはコーヒーマグ飲んでいたので、トイレに行くと、財布の中の札を数えた。八百ドル近くあった。切手を買おうと、二百ドル足らずしか残らないことになる。

が、どうしてもその切手が欲しかった。

それが切手蒐集の屈介なところだ。欲しい切手というものは尽きることがない。切手以外のものを集めるのが趣味だったら——たとえば石とか古い留音機とか美術品だったら——遅かれ早かれ、置き場所がなくなる。ケラーが住んでいるワンベッドルームのアパートメントは、ニューヨークの賑しい住宅事情を考えれば、充分に広いほうだが、空いている壁を全部使ったとしても、それほど多くの絵は飾れないだろう。しかし、切手はちがう。ケラーは分厚いアルバムを十冊持っているが、本種のわずか五フイート分を占めているだけだ。それでも、このさき一生切手を集めつづけ、何百万ドル使おうと、アルバムの空白がすべて埋まることさえないのだ。

デモインまで足を運んだ仕事をやり終えたあとに受け取る報酬を考えれば、スウェーデンの再販切手に六百ドル払えないわけではない。それにマツキューがつけた値段は確かに安かった。カタログに載っている三分の一の値段で切手が手にはいるのだ。カタログに近い値段でも喜んで支払っていただろう。

それに、現金が少なくなったからといって何か困ることがあるだろうか？ あと一日か二日、どんなに長くても三日もすればデモインにはもういない。新聞やコーヒーを買う以外に現金が必要になることがあるだろうか？ 空港から自宅までのタクシー代は五十ドルもあれば足りるだろう。必要なのはそれだけだ。

彼は財布から六百ドルを取り出して胸ポケットに入れると、店内に戻り、もう一度切手を見た。議論の余地はなかった。この子たちはおれと一緒に家に帰る。「現金で払ったら」と彼は言った。「いくらか割引さしてもらえませんか？」

「近頃、現金にはめったにお目にかかれなくなりまして」とマツキューは言い、にやりとした。一方の口の端が吊り上がった。もう一方の端は硬直したままだったが、「売上税の分をお引きしましょう。このことを州知事に言わないと約束してくださいるのなら」

「口にチャックした」

「さきほどお客様がお運びになったノルウェーの切手もおつけします。と言っても、さほど勉強させてもらったことにはなりません。全部合わせても十ドルも超えなかったですよ、ね？」

「六ドルか七ドルだろう」

「でも、ハンバーガー代ぐらいにはなりませんね。まあ、フライドポテトまでは無理にしても、六百ドルびつたりで結構です」

ケラーは金を渡した。マツキューが金を数えているあいだに、買った切手がすべてそろっているかどうか確認し、ジャケットの内ポケットにしまうと、反対側のポケットにピンセットを入れて、カタログを閉じた。そのときマツキューが唐突に言った。「なんてことだ！ ちょっと待ってください」

「偽札だった？ ケラーはその場に突っ立ったまま、何があったのか訝った。マフキユーは立ち上がると、ラジオのところまで行き、音量を上げた。音楽はやんでいて、興奮したアナウンサーが臨時ニュースを読み上げていた。」

「なんてことだ」とマフキユーは繰り返した。「とんでもないことが起きた」